

自己についての存在論的考察

竹 原 弘

I 哲学とは

哲学という学問について、しばしば訳の分からないことをいう難しい学問だというような先入観を持っている人が多いようである。確かに本格的な哲学書を理解することは簡単ではない。何故哲学は難しいのであろうか。そもそも哲学という学問はどのようなことを問題にするのであろうか。哲学が難しいという人（殆どの人にとってそうであらうけれども）にとって、何らかの哲学書を読む場合に、それ故その本の中でいったい何が問題になっているのかが分からないようである。その本の字面から何が問題になっていて、何故そのことが問題になっているのかということが分かったら、哲学書を理解する道が開けて来るのではないだろうか。

それですら哲学はどのようなことを問題にするのか、ということについてのべよう。

私は大学の授業の最初の時間に、「哲学とは自明性を破壊することである」と哲学を定義することからはじめる。自明性の破壊とはどのようなことであらうか。私達が毎日生活する中で、当たり前のことだと思って、それ以上深く考えないことがらが非常に多い。例えば今は何時何分で、そろそろ学校に行く時間だと言う場合に、時間が問題になっている。私達は毎日の生活の中で常に時間を気にして生活をしているのであるが、しかし時間とは何かというようなことを考えたことはないと思う。時間というと、私達は時計の針が指し示す数字が意味する、今は何時何分という時刻を思い浮かべる。私達が日常生活をする上

では、それで良いのであり、ことさら時間とは何かといったようなことを考えるとむしろ生活に支障を来す。しかしある時にふと時間とは何かと自問自答すると、分からなくなってしまう。そのように私達が何気なく生活している日常性の中には、何気なくやり過ごしているけれども、考えると決して当たり前ではないことが沢山ある。

それ故、哲学が問題にしていることは決して訳の分からないことや、自分の縁のないことではなくて、極めて身近なことなのである。

時間については後で述べることにして、ここでは私達が当たり前であると考えていることの中の典型的なこととして、 $1 + 1 = 2$ という小学生でも知っている算数の計算を例に挙げてみる。 $1 + 1 = 2$ という小学生でも知っている計算が、実はよく考えると決して当たり前のことではないのである。1に別の1を加える行為の典型的なものとして、数を数えるという行為がある。数えるという行為は私達が毎日行なっていることで、決して特別なことではないのだが、しかしこの行為は決して当たり前の行為ではない。何かを数えるという行為をする場合、まず何らかの基準を設けることから始める。例えば「今年度の私の哲学概論を受講している本学の学生は何人か」という一つの基準を設けて、その基準に該当する学生諸君を同じとみなす。人間は一人一人がそれぞれ個性を持っていて、一人一人が違うのであるが、そうした違いを排除して、その基準に当てはまる人達を同一視する。そのことによって初めて数えるという行為が成立する。

そのことは別の基準を当てはめても同じことが言える。例えば今年度に某大学に在籍している学生は何人かという、別の基準を設けるとしよう。その場合、先の例よりも同一視する範囲が広がって来るが、基本は同じであり、その基準に当てはまる学生諸君の個別性を無視して、彼等を同じと見なすことによって、その数を産出することが出来る。

つまり $1 + 1 = 2$ という計算が成り立つためには、何らかの基準を設定することによって、その基準に当てはまるものを、そのような同一視するという操作をして数えるのである。つまり何らかの基準に基づいて、加える1と加えら

れる1を同じとみなすことによって初めてこの計算が成立する。私達が日頃色々な場面で色々な計算をしているのだが、その場合意識せずにそのような操作をしている。

今述べた例はあくまで譬えであり、哲学がそのようなことを問題としているというわけではない。けれども哲学が扱う問題は、決して訳の分からないことや、私達の生活とは縁のないことではない。本論ではそのような、日頃当たり前であると思っているが、しかし決して当たり前ではない問題を幾つか取り上げて、筆者の言葉で、つまり借り物の言葉ではなくて、筆者が今まで考えて来たことに基づいて述べてみたいと思う。

Ⅱ 存在とは

哲学が扱う様々な問題の中で、最も古いものとして存在の問題がある。つまり何かが存在しているということはどのようなことであるのか、そもそも存在とは何なのかというような問題である。そのように存在を扱う哲学の領域を存在論と呼ぶ。

私達は先に少し触れた時間の問題と同様に、日常的に存在に関しても言葉で表現する。例えば「僕の本がそこに在る」とか「あそこに椅子が在る」等々のように。しかしそれではそもそも存在とは何か、何かが存在しているとはどのようなことなのか、と問われると、その問いに答えることは困難になる。私達は存在ということについて漠然とした理解は持っているのだが、それでは何かが存在しているということはどのようなことであるのか、あるいは何故何かが存在しているのかと問われると、それに対して答えることは非常に困難になる。

そうしたことについて例えばプラトンはイデア論という形で、そしてキリスト教では神による天地創造というようなかたちで説明してきた¹⁾。ここではあくまで筆者の立場から述べるというスタンスを取りたいので、そうした古来からの哲学者の考えには出来るだけ触れないようにしたいと思う。

まず常識的な観点から説明しよう。150億年から200億年前にビッグバンという出来事が生じて、宇宙が誕生した²⁾。これは哲学の問題ではないけれども、

一応存在について述べる場合には必要なことであろう。宇宙が誕生したということは何を意味するのであろうか。すなわち時間と空間が誕生したということの意味する。ビッグバン以前には何があったかについては私達人間には分からない永遠の謎であろう。しかし宇宙が誕生する以前には時間も空間も無かったと考えるのが普通である。つまり宇宙が誕生する以前には何も存在する場がなかったのである。それ故宇宙が誕生して、時間と空間が生ずることによって何かが存在する場が生じたといえるであろう。

そして様々な銀河系が次から次へと生れ、太陽系が生れ、地球が誕生して、今から約40億年前に地球上に生命体が誕生して、生命体の進化が始まる。これらのことは哲学に属する問題ではなくて、自然科学に属する問題である。しかし今まで述べたことから、何かが存在するということは、時間と空間の中に在るということであるということが分かる。何かが時間や空間の外に存在するということは考えられないことである。私達はそのようなものを知らない。

しかし哲学の長い歴史の中ではそのような時間と空間の外に存在するものを思考によって作り出した。例えばキリスト教の神がそうである。キリスト教の神は私達が存在している時間と空間の外に居ることになる。というのは、神は永遠なるものであり、それは正当派のキリスト教の神学では精神だけの存在であり、物質としての身体を持たないが故に、空間の中にも存在しないものである。要するにキリスト教の神は私達が居るこの世界とは別の世界に居ることになる。実際に神が実在しているかどうかは分からない、もしそのような神が居るとしても、それは存在しているとは言い難いであろう。

というのは、私達の定義では存在するということは、時間と空間の中に在ることである。何故ならば、空間の中に在り、時間の経過の中に在ることがそのものの同一性を保証するからである。論理学でいう同一律「 $A=A$ 」は、論理学の基本法則であるだけでなく、存在の基本法則だからである³⁾。同一律とは例えば「この机はこの机である」「私は私である」というようなことで、当たり前といえば当たりのことであるが、これが論理学の基本法則の一つである。そしてそれはあらゆる存在するものの基本法則でもあるの。そしてその同一律を

存在するものの法則として保証するのが時間と空間なのである。つまりあらゆる存在するものは、空間の中のある場所を占めるという形で存在する。テレビや椅子等は部屋の中の特定の場所を占めるという形で存在している。そしてそれらはある特定の場所を占めると共に別の場所を占めるということはない。一つの存在するものは、一つの特定の場所しか占めることはない。人間の場合も同様であり、私の身体は空間の中の或る一つの場所を占めるが、それと同時に別の場所も占めるということはない。もしそのようなことが可能であるならば、推理小説に出て来るようなアリバイは成立しないということになる。

存在するものは同時に一つの場所しか占めることはないということが、存在に関する同一律を保証してくれる。つまり何らかのものが同一であるということとは、それがあある特定の空間を占めるということの意味する。そして特定の場所を占めるということとは、その場所から他のものを排除することを意味する。つまり同一のものがある特定の場所を占めるということとは、逆に言えば別のものがその場所に存在することが不可能になることを意味するが故に、それは同一性を保っているのである。例えばある場所に椅子が在り、その同じ場所に同時に机が在るということはあり得ない。つまり同一性とは、特定の空間的場所を占めることによって保証される。何故ならば、同じものが同時に二つの場所に存在することは不可能だからである。したがってもし精神だけのものが居て、それが同時に色々な場所に存在し得るということが可能ならば、それは同一ではないということになる。それ故に、神のようなものは特定の空間的場所を占めない精神だけのものであるが故に、それは同一律に反するのであり、それ故存在しているとは言えないことになる。

時間に関しても同様のことが言える。存在するものは同じ時間に同じ場所に存在し、違った場所に存在しないことが存在することであると述べたが、その場合に既に時間について述べたことになる。存在について述べる場合に、時間性も重要な条件になる。「同じ時間に同じ場所に」ということは、時間も存在するものの同一性に深く関わっていることを意味する。つまり同一であることのためには、ある一定の時間の間、存在するものの形が同じであることを条件に

(200)

する。瞬間瞬間にその形を変え、性質を変えるものは同一性を維持しているとは言いがたいであろう。あらゆる存在するものは時間の経過の中で徐々にその形を変えて行く。私達人間も永遠に同じ姿のままにいることは不可能であり、時間の経過と共に年を取ってゆく。しかしその変化の仕方は毎日顔を合わせている人、例えば家族がその人をその人として認知出来るくらいに徐々に変化してゆく。それは人間以外のものに関しても言える訳で、買ったばかりの財布は新しいけど、それも何年も使っていると次第に古くなってゆく。しかしその古くなる速度は、それを所有している人が気づかない手くらい徐々にであり、買った瞬間にボロボロになるということはない。つまり同一律に適うもの、つまり存在するものは一定の間に、それを同じものであると認知出来るくらいの速度で古くなって行くものでなければならない。

それ故、同じ時間に同じ場所で、ということは存在するものが存在するものとして同一性を維持する条件なのである。「同じ時間に」とは、存在するものの持続性を前提にしている。つまりある存在するものが同一性を維持している場合、それが瞬間瞬間かたちを変え、別々の場所に在るということは同一律に反するという意味である。存在するものが同一律を維持していることは時間的に持続することとある特定の場しか占めないということの意味する。

したがって同一律とは時間と空間とがクロスしていることであるといえる。時間的持続性と空間的な一点に在ることが同一律の根拠になる。時間的な持続性を持たずに、次々と形を変えるものであるならば、それは同じものとは見なされないし、空間の中の一つの限定された場に在ることも出来ない。だから時間的なある程度の持続と空間的に限定された場にそれが在ることによって同一律が成立する。

物体はその始まりの時点では必ずしも一定の形に固定されていなかった訳で、物体を構成する様々な要素が誕生したばかりの空間の中を飛び交っていたはずである。そのような場合に同一律は成立しない。物体が何らかの形を持つことによって、そしてそれがある程度の時間的持続を有することと、それが空間内の一点にその存在の場を限定することによって初めて同一律が成立し得るので

ある。すなわち時間的持続と空間的限定とがクロスすることによって同一律は成り立つ。

そうした同一律に基づいて様々な存在するものはそれらが存在する場を確保することが出来る。先に神のようなものは、同一性を持たないから存在するとは言い難いと述べたが、それでは自然科学で問題にする法則はどうであろうか。自然法則なるものは存在していると言えるであろうか。様々な存在するものは、時間が空間とクロスすることによって時空内にその存在の場を得ているが、そのように同一律を維持しながら存在することによって、自然法則に従っている。例えば何かを手を持っていた場合、その手を離すとそのものは落下する。そのことはそのものが引力の法則に従っていることを意味する。

そのことは何を意味するのであろうか。今例に出した引力の法則は手の中という空間的な場所に在ったものを落下させた。そのことは法則というものが、存在するものに作用していることを意味する。存在するものは手の平から床の上か大地へとその存在する場を移動させたが、法則はそのことによってその場所を変化させたのであろうか。あるいはそもそも法則なるものが何処かに在るのであろうか。

法則は私達には見る事が出来ない。それでは何故法則が存在するものに作用していることが分かるのだろうか。それは法則が個別的な存在するものの動きや変化によって、あるいはそれを通して現れるからである。つまり法則は個別的具体的な諸々の現象を通して現れるの。そうであるならば、法則は存在すると言えるであろうか。既に述べたように、存在するという事は同一律的に自己を維持していることであるというように定義した。そのことは時間的に持続し、空間的に一つの場を占めることを意味する。

ところが法則は時間的空間的な場を占める諸々の存在するものを通して自らを現わすが、それ自身は空間的にも時間的にも限定されない。つまり法則は空間のある一点を占めることはないし、時間的な持続性ももたない。自然法則は宇宙のあらゆる所で作用する。ということは法則は空間的に限定されていないことを意味する。また時間的持続性を持たない。法則はいわば無時間的であり、

宇宙の誕生と共に誕生した。それ故に法則は時間と空間のように、存在するものを包み込むが、それ自身が存在するとは言えないであろう。時間と空間が存在するものの可能性を与えるように、法則も同様に存在するものに、存在する可能性を与える。つまり存在するものは法則に従って存在するのであり、だから法則それ自身は存在するのではなくて、存在するものに、それらが存在することの可能性を与えるのである⁴⁾。

法則は同一律的に存在するものに同一律的に存在していることの保証を与える。法則に従うということは、それが空間的・時間的に限定されているが故であると言える。水であろうと空気であろうと、それらは空間的・時間的に限定されているのである。それらは人間が観察した限りでは地球上にしか存在しない。それにそれらが地球上で生じたのは地球が成立してから後であるというように時間的にも限定される。そのことはそれらが時間的・空間的に限定されていることを示唆する。そのようにしてあらゆる存在するものは時間的・空間的に限定され、そして法則に従う。それ故、法則はあらゆる存在するものの存在の仕方を限定するという意味において、あらゆるものの存在の条件であり、存在するものではない。

今まで自然的な存在するものについて、自然科学的観点から述べて来たが、観点を改めて、私達人間の周囲に存在するものについていわゆる存在論的に述べる。私達の周囲に在る諸々の存在するものは大体が人間によって作られたものである。私の居る部屋の中の様々な調度品は全て誰かによって作られたものである。私達はそれらを使用することによって毎日の生活を行なっている。それらは先に述べた存在するものと同様に同一律的に存在している。しかしそれらは単なる同一律的な存在するものではなくて、何らかの意味を持っている。

机はその上で本を読んだり、書き物をしたりする、私達にとって役に立つものである。単なる同一律的に存在するものではない。私達の周囲に在るものは全てそのように何らかの意味を持つものである。つまりそれらは私達が生活する上で何らかの役に立つものであり、私達が何かをする場合に何らかの意味を持つものである。それらを有意義的に存在するものと一応呼んでおこう⁵⁾。

私達はそれら有意味的に存在するものを、それらの本来の使用の仕方以外の使用の仕方で使用する場合がある。例えば椅子は本来の使用の仕方からすれば、その上に座るためのものであり、そのような意味を持っている。しかしそれを高い所に在るものを取るための踏み台として使用するとしよう。こうした使用の仕方はかなり多くの場合に在ると思う。その場合に、それをそのように使用する人は、それが有している意味を変えて使用していることになる。つまり本来座るためのものを踏み台として使用するのだから、その本来の使用の仕方とは違う使用の仕方をしているのだから、その意味を変更して使用していることになる。その場合その同一性はどうなるのであろうか。勿論同一性に関しては何ら問題はない。それが椅子として使用されようと踏み台として使用されようと、その同一性は変わらない。

ところが同じものが沢山在る場合はどうであろうか。例えば学校などでは同じようなパイプ椅子が沢山ある。同じ素材で出来ていて、同じ形をしているから、見分けがつかない。しかしそれらは別々のものだから、それぞれが同一性を維持している。しかしそれを使用する私達にとって、それらは見分けがつかないために、つまりどれも同じように見えるために、同一性の融合が生じる。つまりそれらを使用する私達にとって、それら沢山のパイプ椅子はみんな同じに見えて、区別がつかないために、それぞれが同一性を有して存在していることを忘れがちになる。私達にとって、それらがそれぞれ別々のものであり、それぞれが同一性を維持しているということはどうでも良いことである。

私達の眼にはそれらのそれぞれが違うものであり、それらの各々が同一性を維持していることはさし当たり私達が為すべきこと、つまりそれぞれが一つ一つのパイプ椅子に座ることによってどうでも良いことである。そのことはそれぞれの椅子の同一性が意味によって隠されている事態を意味する。沢山のパイプ椅子はどれも同じ意味を持っているが故に、それらの各々が持っている意味がそれぞれの同一性を隠してしまう。つまりどのパイプ椅子も見分けがつかないために、それぞれの同一性に私達は気づかない。

そのことはそれらがそれぞれの空間の一点を占めて、時間的持続によってそ

の空間の一点と交わるという同一律を、意味が隠蔽しているということの意味する。すなわちそれらの各々が空間の何処に存在するかということは私達にとってどうでも良いことになる。言い換えれば私が座るパイプ椅子がそれら多くの椅子の中のどれであろうとかまわないのである。つまりそれらの中で新しい椅子であろうと、端に在る椅子であろうと、意味的には同じであるが故にどうでも良いことなのである。あるいはそれらの各々が空間のどの一点を占めているか、それが生産されてからどれくらいの時間の経過がであろうと、つまりそれらの空間的・時間的な接点が何処であろうとどれくらいであろうと、それらを隠す意味が同一であればかまわないのである。つまり意味は同一律を隠蔽する。意味によって同一律がなくなる訳では勿論無く、意味が同一律を覆い隠す。つまりそれらを使用する私達にとって同一律よりも、そのものの意味の方が重要であるが故に、意味が同一律を隠してしまう。例えばボールペンを使用している場合、そのボールペンが何らかの理由で使えなくなった場合、私達はそれと同じ種類の、あるいは類似したボールペンを、それに代わって使用する。つまり私達はどうしても今まで使用していたボールペンでなければいけないという風に、同一律にこだわることはなく、同じように使用出来れば別のものでかまわないのである。つまり私達は何かを使用する場合に、ものの同一律よりも意味の同一性の方を優先する。

つまり同一律は科学が扱う客観的な同一性であり、意味の同一性は私達がそれらを使用する場合に、私達にとっての同一性である。先程の例で述べたように、同じかたちをした椅子は、客観的には同一ではないけれども、私達がそれらを使用する場合に、私達にとって同じである。つまり私達にとって同じ意味を有する。私達にとって区別が付かない程同じかたちをした椅子は、客観的に言えば同一ではないけれども、私達はそうした区別に関わらない訳であり、私達が使用する際に同じ役割を果たしてくれれば、つまり意味が同一であれば、私達は同一律には拘らない。

私達が存在しているそうした意味の集まりとしての空間を私達は世界と呼ぶ。世界とは有意味的な存在するものの集まりなのである。私達はその世界の中に

自分が存在する場を得ているのである。したがって世界は同一律によって支配されているのではなくて、意味によって支配されているのである。

世界が開く空間は同一律を成立させる空間ではなくて、つまり客観的な空間ではなくて、有意味的に存在するものの集まりが形成する空間なのである。例えば高いビルは人為的に作られた空間であり、それが形成する空間は様々な有意味的に存在するものの組み合わせによって形成された空間である。その空間にとって、あるいはその空間の中にその存在の場をえている私達にとって、同一律を保証する空間はいつでも良いのであり、大事なのは意味によって形成された空間なのである。例えば階段は私達はそのビルを上下するための空間であり、そこに隠されている同一律を保証する空間はその階段を上り下りする私達にとって無意味なものなのである。またパソコンが並んでいる事務机はそこで仕事をする事が出来る意味空間を開いてくれる。また地上から何百メートルという空間は、ビルが建設される以前は、単なる空虚な空間でしたが、そこにビルが建設されることによって、そこで仕事をする事が出来る空間が形成されたのである。このように意味的空間は人間によって、人間の存在のために形成されるのである。

それでは世界を作り上げている諸々の有意味的な存在するものの意味はどのようにして存在するものに付与されたのであろうか。私の前に在り、私の部屋という世界を形成しているものの一つであるパソコンという有意味的な存在するものの意味は、私によって付与されたのではない。パソコンに限らず、椅子も机も電話も、それぞれ有意味的であり、私の毎日の生活にとって欠かせないものである。それらの意味は誰が付けたのであろうか。先に世界は様々な有意味的な存在するものの集まりであると定義したが、世界の中にはそうした有意味的なものの他に、それらを使用する人間が存在する。人間が存在して、それらの有意味的なものを使用しないと、様々な有意味的なものが存在する意味がない。当然のことながら、様々な有意味的なものの意味は人間にとっての意味である。世界の中に存在している多くの人間が毎日それらの有意味的な存在するものを使用することによって、存在している。人間が存在するという事は、

同一律的に存在するものと違って、単に空間の中の一部を占めるだけではない。諸々の存在するものは既に述べたように、空間の一部を占めることによって存在しているのだが、人間が存在するという事は、それらの存在の仕方とは違って、何らかの有意味的なものに関わることによって存在している。私達は常に世界を形成している様々な有意味的な存在するもののどれかと関わることによって存在している。例えば私が道を歩くという場合、私の身体は道という有意味的な存在するものに関わっているのであり、そのことによって歩くという行為を為すことが出来る。また私が椅子に座って新聞を読んでいる場合、私は椅子と新聞という有意味的な存在するものに関わることによって世界の中に存在している。このようにして私達人間は常に何らかの有意味的な存在するものに関わっているのであり、それが人間の在り方の基本なのである。

そのようにして多くの人達が毎日毎日様々な存在するものに関わることによって存在しているのだが、それは多分現代だけの出来事ではなくて、何千年という人間の歴史の中で、あるいは有史以前から人間は様々な存在するものに関わって生きて来たのである。そうした人間と有意味的な存在するものとの無数の交差を通して様々な有意味的なものの意味が形成されて来た。それ故、世界を形成している有意味的な存在するものという意味は、そのような歴史の過程で、人間との交差の中で付与されたものなのである。それらを人間が使用する中で世界の形が次第に形成されて、現在に至っているのである。現代の世界に特有なパソコンとかテレビ等の場合にしても、それらはそれらと人間との交差の中で意味付与されて、世界の中に定着している。だから諸々の有意味的なものの意味はそれを使用する人間によって付与されたのではなくて、それを使用する人間と有意味的な存在するものとの総体としての世界によって付与されたのであると言って良い。

世界によって意味が付与されたということはどのようなことであろうか。そのことを説明するために、もう少しの論述が必要である。そのことは世界を形成している諸々の有意味的な存在するものが、世界の中で存在しているということはどのようなことなのかについて説明する必要があるであろう。

世界の形、つまり世界の見える姿は昔と今とは異なる。江戸時代と明治と、それに現代とでは世界の形は違う。それは世界を形成している有意味的な存在するものが違うからである。江戸時代に存在していた灯りを灯すための蠟燭とか油とかは現在は江戸時代のような使い方としては存在しない。また馬車とか人力車等も昔は存在していて、世界の形を作っていたのであるが、現代には存在しない。何故であろうか。

少し前にはポケベルなるものが若い人達を中心に使用されていたが、現在は殆ど見かけない。何故かという、ポレベルよりも便利な携帯電話なるものが出現したからである。つまり世界の形は、世界を形成している諸々の有意味的な存在するものが、人間によって使用される限り、世界の中に留まっていることによって決まるのである。人力車とか馬車とか蠟燭とかが世界からその姿を消したのは、それらよりも便利なものが出現することによって淘汰されたからなのである。つまりより便利なもの世界への出現によって、それまで使用されていた蠟燭とか人力車とか等は人間によって使用されなくなったために、世界から姿を消したのである。そうしたことから世界の形は様々に変化して行つたし、また現在も変化しつつある。

そのことは世界の中で存在するものが、世界の中で留まっていて、現在の世界の形を形成している理由を説明している。諸々の有意味的な存在するものが世界の中に存在することの理由は、それらを使用する人間が現在もまだそれらを使用しているが故である。したがって世界の中に存在しているということは、それが使用されているということの意味する。それらが私達によって使用されている限り、それらの有意味的な存在するものは世界の中に定着して、世界の形を形成している。しかし現在の世界の中に定着している諸々の有意味的な存在するものも、いずれもっと便利なものが出現することによって、私達がそれらを使用しなくなったら、それらは世界から姿を消す運命にある。

それで先の問いである、世界によって有意味的な存在するものの意味が規定されるといふことはどのようなことなのかということについて、答える準備が出来た。つまり諸々の存在するものの意味は、それらを使用する人々によって

規定されるのであり、そのことによって世界の中に定着するのである。つまり世界の中に存在して、世界の形を形成している様々な有意味的な存在するものの意味は、私達世界の中にその存在の場を得ている人間が様々なことを為すために、それらを使用する限りにおいて規定され、世界の中に定着するのである。携帯電話がそれとして私達によって使用される限り、それは世界の中に残り、世界の形の一環を形成する。それをある人が独自の使用の仕方をする（例えばそれを枕として使用するとか）ことによって、その人がそれに独自の意味を与えても、その意味は変更されることはない。つまり諸々の有意味的な存在するものの意味を、個人的に付与したり変更したりしようとしても無駄であり、その意味は変更されない。何故ならば、有意味的な存在するものの意味は一人一人の人間によって規定されるのではなくて、意味の集合態としての世界によって、つまり意味がひしめき合っている世界の中で、他の諸々の有意味的な存在するものとの間の差異化によって決められる。急須と湯飲み茶碗との間の意味の違い、差異はそれを世界の中に定着したものとして使用する人達の使用の仕方の差異によって決まるのであり、個人的にその意味を変更出来ることは出来ない。意味はそれを使用する人達によって世界の中に根ざされていて、世界がその意味によって機能する限りその意味は変えられない。私が湯飲み茶碗に花を生けても、世界の中に定着しているその意味が変わることはない。そのような意味で、諸々の有意味的な存在するものの意味は世界によって規定されているのである。

III 私とは

あなたは誰ですかと聞かれた場合、「私は田中角栄です」とか「私はペ・ヨンジュンです」とかのように、自分の名前を相手に言うのが普通である。つまり常識的世界である世間では、あなたは誰かと聞かれた場合に、名前を言うことによって「私」が誰かについて答えていることになる。しかし私＝名前であろうか。名前は「私」に貼られたレッテルのようなものであって、私そのものではない。女性の多くの場合には、結婚して嫁ぐと、姓が変わるが、しかしその

人は昔のままのその人であり、独身だったのが、誰かの奥さんになっただけに過ぎない。そのことがその人の人生にとって大きな変化であり、転機であることは間違いないが、その人自身は何も変化していないはずである。それ故、名前がイコールその人の「私」であるとは言えない。

では私とは何であろうか。ここでは一応、「私」とは「パースペクティブの中心」と定義しておこう。つまり私達は両眼で色々なものを見る。両耳で色々な音を聞く。手で色々なものに触れる。口で色々な食べ物をたべる等々。そうした様々な外からの刺激はバラバラにならないで、「私」の中である秩序の下に配列される。つまりあるパースペクティブを形成する。幾つかの感覚器官を通して私達の中に入って来る様々な刺激は、それらが私達の中に入ると、色々な条件によって配列される。最も関心を惹く事柄は私達の中で大きくなり、それに対してさほど関心を惹かない事柄は私達の中の隅の方で目立たずに配置されたり、あるいはすぐに忘れてたりする。例えば一時も忘れられない心配事は私の中で大きくふくらんで、私の心全部を占領する。それに対して誰かに頼まれていたことはすっかりと忘れてしまって私の意識の片隅からも消えてしまう場合もある。そのようにして様々な刺激は私達の中で配列されるが、その遠近法的秩序（つまりパースペクティブ）の中心に「私」が在る。つまり「私」はそうした様々な外からの刺激を秩序付ける核のようなものとして在る。

しかしそのようなパースペクティブの中心としての「私」は普段は表面に現れず、隠れたままである場合が多い。「私」によって私の心の中に配列された様々な外からの刺激は表面化していて、それらは大なり小なり心の中の位置を占めている。ところがそれらをまとめ上げた核としての「私」は何処にもない。「私」というものが私の心の中の何処に在るのか探してみよう。恐らくそれぞれの心の中を探っても「私」なるものは何処にも見いだせない。ここで「」付きの「私」はここで問題としている私であり、それに対して「」なしの私は便宜上使っている私、つまり表現上やむを得ず使っている私である。つまりそれは瓶に這ったラベルのようなものとしての私である。「私」というものが普段隠れているということ具体的例で説明しよう。例えば私が何人かの人達と

山の上から下界の景色を見ているとしよう。その場合に、私は横に居る友人と同じ景色を眺めていると常識的に思っている。厳密に言えば、他者が、私が見ている景色と同じものを見ているのかどうかは分からない。私は他者の心の中までは分からないがために、私の横に立っている友人が私と同様の景色を眺めているかどうかは分からないはずである。同じものを見ている、その同じものが私と他者は同じように意識の中に映じているかどうかは証明のしようがない。

しかし毎日の生活の中ではそのように厳密には考えないのが普通であり、私は他者が果たして私と同様に見ているかどうかなどといちいち考えない。常識的には私と他者は同じものを見ているのであり、私も他者も山の上から下界の景色を、同じように美しい景色として眺めていると思っている。つまり山の上から景色を眺めている私は、私だけが見ているのではなくて、私を含めた何人かの仲間が見ているというような漠然とした雰囲気の中で景色を見ているはずである。そこでは「私」というものが前面に出て来ないで、背後に隠れていて、私と何人かの仲間の視線が一体となった視線一般によって景色を見ている。その場合、「私」というものがどこかに隠れていて、姿を現わさない。「私」が見ているという自己主張はなく、漠然とした一般的な感覚しかない。強いて言えば、「それ」が見ているというような感じであろうか。

私達は身体を持つ存在である。この身体的感覚というものも同様に漠然とした感覚である。私達の手足は私達の意志の通りに動くのであるが、その手足にも「私」という強烈な自己主張はなく、手足一般という漠然とした感覚があるだけである。

私達は自分の身体を内から把握する。風邪を引いて頭が少し痛いとか、もうお昼時だから腹が減った とかのような場合、私達は自分の身体を内から捉えていることになる。しかしその場合も自分の身体についての漠然とした感覚が在るだけで、そこには「私」の身体といったような明確なものはない。私達が自分の身体を内から把握する場合に、自分の身体がどのような形をしているのか、どこまで広がっているのかについても明確な自覚は殆どない。

私達は自分のことを「私」とか「僕」とか「俺」とかというように一人称で呼ぶが、普段はその一人称的な自分は何処かに隠れてしまっていて、人一般という漠然としたあいまいな感覚が在るだけである。そうした漠然とした感覚の中心に在るはずの「私」は何処に隠れているのであろうか。

前にも述べたように、私達は普段は「私」の身体を意識せず、身体一般、あるいは「その」身体としてしか自分の身体を感じない。また自分の身体がどのような形をしているのか、どれくらいの広がりがあるのか、についても漠然としか分からない。ところが日曜日に新宿の人混みの中を歩く時や、満員電車の中で他の人々の身体に押されている場合、私達は自分の身体の限界を感じる。それは外から私の身体を輪郭付けられることによって、否が応でも自分の身体の輪郭を知らざるを得ない場合である⁶⁾。

それと同様に私が誰かと議論をしている時、私はその人の意見と対立している訳であり、その場合に人一般は何処かに消え失せてしまい、「私」が現れる。すなわち誰かと議論をしている場合に、景色を見ている時のように私の視覚と他者の視覚とが融合している状態は瓦解して、私は自らを他者に対して孤立させる。人一般はその場合に、「私」の出現によって消え去る。「私」は意見の対立によって、他者とは違う者として自らを顕わにせざるを得ないのであり、「私」の出現のきっかけになる。

あるいは一人の女性を誰かと取り合っている状態の時、つまりいわゆる三角関係の状態に在る時、その女性への愛情の絆、あるいは未練を意識する者として「私」は出現する。「私」の恋心は、競争相手の存在によってより自己主張をする。つまり他者との漠然とした同一性が崩れ去った時に、「私」は現れる。

「私」とは「パースペクティヴの中心」であると定義したが、「パースペクティヴの中心」としての「私」は普段は眼を覚まして現れる必要はないのであり、それは漠然とした感覚内容の背後に隠れている。ところが漠然とした他者との一体感が崩れると、「私」は闇の中から現れるようにして現れる。

パースペクティヴは言い換えれば世界のことである。私達は他者との間で一体感を形成している時は、様々な外的刺激をことさら「私」が受容した、「私」

(212)

だけの感覚内容とは考えないで、それらを他者と共有している感覚内容と考える。目の前に広がる広大な景色とか、聞こえて来る美しいメロディとかは他者と共有している共通の感覚的刺激であると私達は思う。それが世界であり、世界とは言い換えれば他者と共有している感覚的刺激の内容のことである。前の章では、世界は有意義的な存在するものの集まりであると規定したが、それらを私達が受容すれば、感覚的刺激であるということになり、そしてそれらは他者と共有しているものであると私達は常識的に思っている。

ところが何らかの形で、他者との一体感が崩れると、他者と共有していたという素朴な感覚が崩れて、それらの中心を為す「私」が出現する。「私」のそのような出現は、私と他者との一体感が崩れたことを意味する。他者との一体感の崩壊は、他者との間の何らかの競合関係が生じた時に生ずる。例えば他者との間に意見の不一致が生じて、議論が為される場合、他者との一体感が崩れて、それまで他者と共有していた素朴な世界の共有感も崩壊して、それと共に「私」が現れる。「私」は私の眼前に広がる世界のパースペクティブの中心に位置して、ことさらに「私」の世界を強調する。

それではこの「私」は既に述べた同一律を維持しているのであろうか。同一律「私は私です」は「私」が隠れていようが、現れていようが、常に私の存在の根底に在って、私の同一性を維持する。

Ⅳ 自己についての考察の結論

このように人間存在は宇宙の誕生に伴う空間と時間の成立によって、他の諸々の存在者と共にそれが存在する時間的・空間的場を得ることによって、宇宙誕生から、またそれに伴う地球誕生から何億年を経て存在し始めた。人間存在のみが自己についての意識を持ち、そして自己が存在するための媒介としての様々な意味的存在者を作ることによって、より多様な在り方を、多様な有意味的存在者によって開かれた世界の中で構築することを可能にした。人間存在にとって、宇宙誕生と共に与えられた存在者の同一律性よりも、人為的に作られた有意味的存在者の有意味性の方がその存在の仕方を構築する上において、よ

り有効であり、身体的存在者としての人間存在がその身体的能力を発揮出来る契機となった。

自己は多様な外からの刺激を集約する世界の中心であり、軸であり、それは常にあらゆるものを自己の内へと集約させることによって、その存在の日常性を作り上げている。それ故に「私」とはそれぞれにとってパースペクティヴの中心なのである。

注

- 1) 存在論は多様な意味が在るが、大まかに言って様々なものが存在していることについての哲学的な解明を言う。つまり特定の領域ではなくて、存在するもの全体を視野に入れて、存在することの意味を問う哲学の領域。プラトンのイデア論は、普遍的なもの(イデア)が実在し、それによって個別的なものが存在することが可能になるという考え。西洋の存在論の中で最も古いと言われている。『国家論』『饗宴』等に詳しく述べられている。キリスト教における神による天地創造は、ある意味ではプラトンの考えを継承した要素も在る。つまり神が万物を創造する場合、神はプラトンから受け継いだイデアに基づいたという説の中にプラトンのイデア説が取り入れられている。こうした考えは中世の神学の中での、いわゆる普遍論争の原因となった。
- 2) ビッグバン(大爆発)は、旧ソ連生まれで、アメリカに亡命して、アメリカで活躍した物理学者ジョージ・ガモフの造語。ビッグバンによって宇宙が誕生したという考え。
- 3) 同一律を存在論的に解釈することは、埴谷雄高の大作『死霊』に負うところが大きい。『死霊』の主人公である三輪与志が「自同律(同一律のこと)の不快」というかたちで、つまり「私は私である」ことへの不快というかたちで、同一律を自己の存在していることの気分として述べている。そうしたことから過誤の宇宙史とか虚体論へと壮大なスケールで展開している。
- 4) 例えばフランスの哲学者アンリ・ベルクソンは、自然法則をプラトンのイデアと見なしている。
- 5) 「有意味的なもの」という概念は、ハイデggerの道具存在者の考えからの影響。
- 6) メルロ＝ポンティは、そのように自己の内面から把握された自己の身体像を身体図式と名付けている。『知覚の現象学』参照。

(たけはら ひろし・委嘱研究員)

Ontological Research about Self

Hiroshi Takehara

Human beings commenced their existence hundreds of millions of years after the beginning of the earth, which followed the birth of the universe, space and time. Only human beings have consciousness of their own existence and are able to construct a meaningful existence. For human beings, meaningful existence is more useful than the principle of identity, which was born at the same time as the universe. The self is the center which integrates various stimuli from outside and the axis of the world. Everything is integrated to constitute daily life. So “I” is the center of perspective for everyone.